

メリメの『カルメン』：カルメンの人物像

水本, 弘文

<https://doi.org/10.15017/2332734>

出版情報：文學研究. 72, pp.249-262, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

メリメの『カルメン』—カルメンの人物像

水 本 弘 文

プロスペル・メリメ Prosper Mérimée, 1803-1870 は一般に端正な文章をもつストーリー・テラーとされているが、彼が四十二歳の時に書いた中篇小説『カルメン』 *Carmen*, 1845 には、その筋と技巧を超えるものが見出される。それは、この作品の主人公カルメンの人物像である。

今日では、小説『カルメン』を読まず歌劇『カルメン』 *Carmen*, 1875 を観ない人々でも、その多くがカルメンの名を知り、しかもカルメンについてある共通したイメージを描くことができる。カルメンはすでにメリメの原作を離れ、またビゼー Bizet の歌劇からも離れて、彼女に固有の生命をもつまでになっている。

カルメンはどんな女なのか、それをメリメの小説『カルメン』において考えてみたい。

—

カルメンが論評の対象になり始めて間もない一八五三年に、サント・ブーヴ Sainte-Beuve は次のように書いている。

このスペインのジプシー女。実直なバスクの男ドン・ホセを悪に導き、律義な兵士であったものを山賊に仕立て上げ、ついには絞首台に送る。このカルメンは、よりわさびの利いた一種のマノン・レスコーに他ならない。⁽¹⁾

これはカルメンを「妖婦」femme fatale としてとらえたものである。カルメンはドン・ホセを破滅させ、彼女自身も自己の妖婦性によって滅びる。その意味でカルメンは妖婦である。だがこうしたカルメン観は、カルメンをそれ自身で問題にしたものではない。これは、ドン・ホセの運命を支点にして見られたカルメンである。作品の中心となる第三章の身上話、すなわちカルメンとドン・ホセの恋物語は、その進行がドン・ホセの転落の過程と歩調を合せている。したがって、筋の展開にとってのカルメン、ドン・ホセの運命にとってのカルメンというものを考える時に、彼女は「妖婦カルメン」となって浮かび上る。

当然のことながら、カルメンは単に筋に組みこまれただけの人物ではない。また、ドン・ホセの運命を説明するための人物でもない。カルメンはそれ自身の意味を担った主人公であり、それ自身の性格を有する実体である。

たとえば闘牛士ルーカスであれば、これは筋の中でしか意味をもたぬ人物である。彼については筋とのかね合いでその人物を理解すれば足りる。ルーカスはカルメンがドン・ホセに殺される直接のきっかけとなる男だが、闘牛士ということ以外は、容貌も性格も何一つ具体的には知られない。言いかえれば、ルーカスは単に「闘牛士」という一般的なイメージのもとに、あるいはカルメンの「新しい情夫」という役割のもとに存在するだけである。存在感が稀薄である。

一方、カルメンの一人の女としての存在感には確かなものがある。多くの場面で、カルメンは、筋の展開やドン・ホセとの関係に則してというよりも、彼女自身の存在の在り様に則して語られるのである。

竜騎兵伍長ドン・ホセはセヴィリヤの煙草工場の警備についている。そこへカルメンがやってくる。二人の出会い

の場面である。

女は赤いベチコートをつけていましたが、それが大変短いものなので、幾つも穴のあいた白い絹の靴下が見えていました。赤いモロッコ皮のかわいい靴は燃えるような赤いリボンで結んでありました。女はショールをひろげ、肩が見えるように、そして肌着から覗いているアカシヤの大きな花束が見えるようにしていました。女は口の端にもアカシヤの花を一輪くわえていました。そして、コルドヴァの牧場の若い牝馬のように、腰を振りながら歩いて来ました。私の故郷でしたら、こんな恰好の女は私たちに魔除けの十字を切らせることになるのですが、セヴィリヤでは誰もかれもこの女の恰好にみだらなお世辞を浴せていました。女は握りこぶしを腰に当て、いかにもジプシ—女らしい凶々しさで、男たちのひとりひとりに流し目を送って応じていました。⁽²⁾

語り手のドン・ホセはこのカルメンをいやな女だと思っている。だがわれわれは、ドン・ホセのそうした気持には関りなく、カルメンがどういう女なのかを具体的に知ることができる。カルメンは人を恐れない、挑発的で、自信満々の、そして生氣に満ちた女として現われている。

カルメンには肉体も精神も備わっている。したがって、カルメンについては、物語の中で彼女が果す役柄においてだけでなく、直接彼女の個性を問題にした理解というものが可能である。

二

カルメンは一人で生きる女、閉ざされた自分一人の世界を生きる女である。その生き方には外界との真の交流がな

い。カルメンの自由、カルメンの情熱、カルメンの死、それらはカルメンのこの単独者性において理解される。

※

ドン・ホセはなぜカルメンの虜になるのか。カンディレホ通りにあるカルメンの知り合いの老婆の家で、ドン・ホセはカルメンの次のような鮮かな存在に触れる。ドン・ホセが真にカルメンに魅せられるのはこの時からである。

私は女に踊るところが見たいと言いました。しかし、カスタネットがありません。女はすぐに老婆の一枚きりの皿をつかみ、こっぴみじんに打ち割りました。そして早くも、女はロマリスを踊り始めました。瀬戸物のかけらをまるで黒檀か象牙のカスタネットのように、上手に打ち鳴らしながら。

カルメンの発想は自由で自然であり、行為は大胆で素早い。カルメンは皿をカスタネットに変える。ドン・ホセにとって皿は皿ではないが、カルメンはその皿にカスタネットを見ることが出来る。カルメンは老婆の皿を、それも大切な一枚きりの皿をためらいなく打ち碎ける女である。

カルメンの自由は彼女の強い主体性からきている。カルメンは自分の欲求に合わせて周囲の事物を見、操作し、変形する。言いかえれば、自分の立場を離れないカルメンの前では、事物はそれ自身の習慣的な、静的な性質を維持することができない。そこに、カルメンの魅惑というものが生れる。カルメンの手にかかると、この世界が固定したものから、流動的なものになるのである。「この女のそばにいて退屈するということはありません」とドン・ホセは語る。

カルメンの自由奔放さはドン・ホセにとって大きな魅力であるが、ドン・ホセの苦悩もまたこのカルメンの自由奔

放さに起因している。カルメンの自由は我執の裏返しだからである。それは、何かへ向つての自由というものではなく、ただ自分を拘束するものからの自由である。カルメンはドン・ホセが自分の生き方に干渉し始めると、激しく反発する。

「いいかい、お前があたしの本当のロム（亭主）になつてからはね、あたしはお前があたしのミンチョロ（情夫）だつた頃ほど、お前を好きじゃないよ。あたしはうるさく言われるのが嫌いだし、とくに命令されるのは大嫌いさ。あたしはね、自由でいて、そして好きなことをしていたんだ。」

カルメンの自由は、いわゆる「小鳥のような」自由、マノン・レスコーのような無邪気さからくる自由と区別されねばならない。カルメンとマノン・レスコーに共通するのは、カルメンがドン・ホセにたいして、マノン・レスコーが騎士グリユーにたいして、それぞれ優位にあるということである。男たちは彼女らの気ままな振舞いに引きずりまわされる。だが、カルメンは常に自己決定的であり、彼女にはマノン・レスコーに見られるようなあやふやさがない。「浮気なマノン」は流刑地アメリカへ流されてからは、騎士グリユーへのいたわりと誠実さを示し、「貞節なマノン」に変わる。マノン・レスコーには表立った自我というものがなく、彼女はただ周囲の状況に合わせて自分をつくつていく。彼女が騎士グリユーをたびたび裏切り、また金持の父子を欺す際にも、彼女のそうした行為にはある無邪気さが伴うことになる。人を欺してもマノン・レスコーには欺すということの自覚がない。したがって、捕えられ罪を責められると、彼女はびっくりし、恐れ、怯えてしまう。いわばマノン・レスコーは、自分を知らず、自分のしていることの意味を知らない子供のようなものである。

一方、カルメンの行う悪事はそれが悪事であることを知った上でなされている。彼女にはそれが生活の型であるか

ら、ためらいはない。行為の意味を承知しているから捕えられないための知恵も働く。脱走兵となったドン・ホセにカルメンは言う。

「ねえ、お前、お前は自分で何かしなければならぬよ。王さまはもうお前に米も干鱈も下さらないんだから、自分で食べていくことを考えなければね。お前は間抜けだから気の利いた盗みは無理だろうけど、身体ははしっこくて力がある。もし勇気がおありなら、海岸へ行くんだね。そして、密輸入者になるんだ。」

カルメンの自由は彼女の一種の明断さに裏付けられている。カルメンは自分が何をしているかを知っており、自分が何者であるかを知っているのである。知り合っていないドン・ホセに、彼女は言う。

「いいかい、あたしはお前に少し惚れているみたいなのさ。でも、長続きはしないよ。犬と狼が長いことうまくやっていたわけはないんだからね。……あたしは羊の毛の着物を着ているけど、羊じゃないんだ。」

カルメンはドン・ホセに、彼女が彼とは別種の人間であることを分らせようとする。そして、カルメンは常にカルメンであり続けようとする。

カルメンの自由は、自分であり続けるための自由である。物語の終り近く、カルメンの気まま振りに苛立ったドン・ホセはカルメンを殺そうと思う。カルメンは生への執着を示さず、自分を別の自分、ドン・ホセの望むような自分に変えることを拒絶する。

「お前はあたしのロムだから、お前のロミ（女房）を殺すことはできる。だけど、カルメンはどこまでも自由だろうさ。カリ（ジプシー女）として生れたカルメンは、カリとして死ぬだろうよ。」⁶⁾

ドン・ホセはカルメンに逃げる機会を与えるが、彼女は逃げない。そのひとつの理由として、彼女の自由のこの自己目的性を考えることができよう。つまり、カルメンの自由は、未来を必要とする自由、言いかえれば何かへ到達するための自由、何かを実現するための自由ではないということである。それは、死ぬことよりも、ドン・ホセを恐れることによって、つまり他人を無視できなくなることによって一層損われるような自由なのである。

※

カルメンの情熱、あるいはカルメンの愛について考えたい。

カルメンを創造したのはメリメだが、カルメンの名を世界に広めたのはビゼーである。歌劇『カルメン』はメリメの小説をもとにして、メイヤックとアレヴィ Meilhac et Halévy が台本を書き、ビゼーが曲をつけた。初演は一八七五年三月三日、パリのオペラ・コミック座である。これは小説『カルメン』の発表から三〇年後で、メリメの死後七年目である。

「恋する女カルメン」、「情熱の女カルメン」のイメージは、歌劇『カルメン』の明るく華やかな舞台から生まれた。歌劇のカルメンは小説のカルメンをかなり単純化している。

歌劇のカルメンは恋を生の指標とする情熱の女である。彼女はドン・ホセを誘惑し、次には闘牛士エスカミーリョを愛するようになる。第四幕、カルメンはエスカミーリョと連れだって登場し、彼と愛の二重唱を歌う。これから闘

牛が始まるうというところである。

エスカミーリヨ——もしお前がおれを好きなら、カルメン、お前は今すぐ、おれのことを自慢できるだろう！

もしおれを好きなら！　もしおれを好きなら！

カルメン——ああ！　あんたが好き、エスカミーリヨ、あたしはあんたが好き。死んだっていいわ、今まで、これほど好きになった男がいたなら！

エスカミーリヨ——ああ！　おれはお前が好きだ！　そう、お前が好きだ！

カルメン——ああ！　あたしはあんたが好き！　ええ、あたしはあんたが好きよ！

闘牛士のエスカミーリヨは小説の闘牛士ルーカスを原型としたものであるが、小説においてドン・ホセの恋仇となる男たち（片目のガルシア、ルーカス、それにジブラルタルのイギリス貴族など）を代表する形で登場している。歌劇のカルメンはこの闘牛士エスカミーリヨを本気で愛しており、その点で小説のカルメンとは別な人物になっている。

第四幕、先に続く場面で、ドン・ホセは闘牛場に入ろうとするカルメンをつかまえて、エスカミーリヨとの仲を問う。このやりとりは小説にもあり、歌劇のカルメンと小説のカルメンの恋にたいする態度の違いが現れている。

歌劇では次のとおりである。

ドン・ホセ——あいつに会いに行くんだな、おい……あいつが好きなのか？

カルメン——好きよ！　好きよ！　死を前にしていたって、何度でも言うわ！　あたしはあの人が好きよ！⁽¹⁰⁾

小説ではこう書かれている。

「じゃ、お前はルーカスが好きなのか？」と私はききました。

「そうよ、あたしはあの男が好きだったわ。お前を好きだったように、一時はね。それも多分、お前ほどじゃなかったらうけど。今のあたしは、もう、誰も好きじゃない。お前を好きになった自分を憎んでいるんだ。」⁽¹¹⁾

このあとすぐ、カルメンはドン・ホセに殺される。

小説のカルメンについて言えるのは、恋は彼女にとって自己享楽のための一つ的手段でしかないということである。このカルメンは恋を、そして恋の相手を、それ自身では重要視しない。彼女には特定の男への執着というものがなく、気ままに男から男へと渡り歩く。彼女は相手がだれであろうとお構いなく、いわば自分一人で勝手に楽しんでるのである。

こうしたカルメンとは対照的に、ドンホセの愛はカルメンを離れることができない。ドン・ホセはカルメンを除外した自分の人生というものを考えられない程に、カルメンの虜になってしまふのである。カルメンを殺そうと決意した時、彼は、彼女を殺すことが同時に自分を殺すことでもあるのを知らねばならない。

「カルメン！ おれのカルメン！ おれにお前を殺させないでくれ、お前と一緒におれを死なせないでくれ。」⁽¹²⁾

ドン・ホセにとってカルメンは絶対的な存在である。そしてカルメンにとっては、ドン・ホセは彼女の知っている

多くの男たちの中のひとり、ということ以上には出ない。カルメンは自分を必死で求めるドン・ホセを嘲笑し、突き放す。デュプイ Dupouy はカルメンのこの態度に触れて、「次のことを理解しよう。彼女のドン・ホセにたいする軽蔑の奥には、女を愛する男への、そして愛した女を手段としてではなく目的として考える男への軽蔑があるという(13)ことを」と語っている。

カルメンの情熱はカルメン自身を目的としたものである。彼女が男を愛するとき、彼女にとって真に問題なのは、恋でも相手の男でもなく、恋によって、男によって活気づく自分自身の生なのである。

※

カルメンは自由な自分の立場を守ろうとし、ドン・ホセはそのカルメンを自分の「所有」にしようとする。カルメンとドン・ホセの関係は二つの相反する意思の争いである。勝利はいつもカルメンが握る。カルメンの優越は最後のドン・ホセに殺される時においてさえ崩れない。

ドン・ホセはカルメンの恋人になって間もなく、カンディレホ通りの家へ彼女と連れだつて入ってきた彼の上官を刺す。彼はまた、カルメンにすでに片目のガルシアというロムのことを知ると、これを決闘で殺す。カルメンが闘牛士ルーカスといい仲になったことを知ると、これも殺そうとする。闘牛場の牛がドン・ホセに代つてルーカスを倒す。ドン・ホセのこうした振舞いは、カルメンを他の男たちから「専有」しようとするものであるが、結局彼は、男たちをいくら殺しても彼女を「所有」すること、彼女を自分の思いのままにすることにはならないのに気付く。

「考えても見ろ、もし奴(ルーカス)がなおつたとしても、ただでは済まさないんだぞ。それにしても、どうし

ておれが奴を恨むことがある？ おれはお前の情夫を次々と殺すのには、うんざりしている。今度はお前を殺す番だ。」¹⁴

カルメンはドン・ホセの馬に乗り、一緒に町を出る。カルメンの死を考える上で注目すべきは、自分がドン・ホセに殺されて死ぬということとをカルメンが二人の関係の初めに予感していたことである。

「あたしはお前があたしを殺すだろうといつも思っていたよ。最初にお前に会った時、あたしはあたしの家の戸口で坊主に出会ったところだったし、それに今夜コルドヴァを出る時、お前は気付かなかったかい？ 野兎が一匹お前の馬の脚のあいだを駆け抜けたんだ。これは運命が決めたことな¹⁵のさ。」

カルメンは、自分の死をすでに自明のことと見なしている。したがって、生活を変えて二人でやり直そうと言うドン・ホセの言葉に、彼女は笑い出すだけである。彼女の返事は運命を受け入れた者の言葉である。

「あたしが最初で、次がお前さ。よく分ってるんだ。そうなるってことはね。」¹⁶

ドン・ホセはミサを頼みに修道者の庵へ寄り、その間、カルメンを一人にする。ドン・ホセは内心、カルメンがそのまま逃げてくれることを願っている。だが、すでに自分を運命と結びつけているカルメンは、ドン・ホセを切り捨てた自分一人の世界に沈潜している。カルメンは逃げずにドン・ホセの戻るのを待つ。

女は自分の占いに大層夢中になっていましたので、最初私の戻ったことに気付きませんでした。女は鉛の一片を手にとって、悲しげに、これをあちらこちらに廻してみたり、あの魔法の歌のようなものを歌っていました。⁽¹⁷⁾

カルメンはドン・ホセとの関係においてそこにいるのではなく、むしろ自分の運命との関係においてそこにいるのである。

私たちは寂しい谷間へ来ていました。私は馬をとめました。

「ここかい？」女は言いました。そしてひらりと地面に降りました。ショールをとり、それを足もとに投げずて、握りこぶしを腰に当て、身じろぎもせず、女は私をじっと見つめました。

「あたしを殺す気ね。よく分ってるよ。運命の決めたことだからね。でも、お前の言いなりにはならないよ。」⁽¹⁸⁾

カルメンはドン・ホセの短刀で二突き刺されて死ぬ。デュパイはカルメンの死について、「刺すのは男である。しかし、弱者は彼の方である。短刀の下においてさえ、支配的なのは女である」⁽¹⁹⁾、とカルメンの優越を語っている。

カルメンから終始からかわれ、嘲られてきたドン・ホセは、彼自身で手を下しておきながら、なお、カルメンの死から疎外されている。形こそ暴力死だが、カルメンの死は彼女の心理において自己の運命の受容でしかなく、カルメンは自分の死を自然死として受けとめているのである。

カルメンの死は、彼女と彼女の運命とのあいだの問題であって、すでに彼女とドン・ホセとのあいだの問題ではないのである。

※

カルメンはその内奥において他との交流をもたず、自分一人の運命を見つめながら、孤立した生を生きる女である。彼女はどこへも向っていない。自由も情熱も死も、彼女の生の内部で生起し、限定され、終熄する。

カルメンのこうした人物像に、生涯をダンディで押し通した作者メリメの苦渋、高踏的な精神の底にある孤独感を見ることができよう。

註

- (1) Sainte-Beuve: *Causeries du lundi*, t. VIII, Garnier Frères, p. 384. (article du 7 février 1853)
- (2) Mérimée: *Romans et nouvelles*, t. II, Classiques Garnier, p. 367.
- (3) *Ibid.*: p. 378.
- (4) *Ibid.*: p. 378.
- (5) *Ibid.*: p. 395.
- (6) *Ibid.*: p. 383.
- (7) *Ibid.*: p. 379.
- (8) *Ibid.*: p. 401.
- (9) 第4幕 第28番
- (10) 第4幕 第27番
- (11) Mérimée: *Romans et nouvelles*, T. II, p. 401.

- (15) Ibid: p. 401.
- (16) Dupouy: *Carmen de Mèrinée*, les Grands Événements Littéraires, S. F. E. L. T., 1930, p. 94.
- (17) Mèrinée: *Romans et nouvelles*, T. II, p. 399.
- (18) Ibid: p. 399.
- (19) Ibid: p. 399.
- (20) Ibid: p. 400.
- (21) Ibid: p. 401.
- (22) Dupouy: *Carmen de Mèrinée*, p. 98.